
楽園の果て

翠月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園の果て

【Zマーク】

N1009X

【作者名】

翠月

【あらすじ】

「あなたは、？神様？なのですよ」

突如記憶を失った少女。

彼女は楽園と呼ばれる国の？神様？と呼ばれるものだった。

異世界で起こる恋愛ファンタジーです。

△△△（前書き）

ゆづくつなベースになつてしまふかもしけませんが、完結せやら
れるよう頑張ります。

これはオリジナルです。無断転載などしないよう、お願いします。
誤字脱字等がございましたら、遠慮なく言つてください。

緑豊かな草原。

どこまでも広がるその大地。

その一部に、少女が一人倒れていた。

綺麗に伸ばされた漆黒の髪が無造作に散乱し、力無く腕や足が伸びている。

一見すれば、死んでいるのかと思つほどだ。

白く透けるような肌を風がふわりと撫でる。

少女は閉じた瞳の奥で、混乱したように目を泳がせていました。

動かない。

目を開けようとするが、どれだけ力を入れても目蓋が持ち上がりない。

指に力を入れても、目蓋同様、動かないのだ。

まったく言う事の聞かない体に、少女の不安は増してゆく。自分の身に、何が起こっているのだろう。

ただ唯一分かるのは、自分の体がとてもない疲労感に覆われてゐること。

ここがどこなのか、なぜ自分がこんなにも疲れ、倒れているのかさっぱりわからない。

自分の、名前さえも。

「つ……！」

瞬間、強烈な目眩に襲われ意識が薄れしていく。

意識が途切れる寸前、自分の体に当たる風がピタリと止まった気がした。

次に少女が目覚めたのは、白く柔らかなベッドの上だった。

ぼんやりと薄つすら田を開けた先に見えるのは、白い天井。

少女は背中にあたる柔らかな感触に体を預けた。

先ほどより疲労感は軽減しており、体も自由に動くようになっていた。

腕に力をいれ、ゆっくりと体を起こす。

そして部屋を見渡し、小首をかしげた。

窓から吹く風になびく白いカーテン。小さめのサイドテーブル。

服が何着も入るであろう大きなクローゼット。

見たこともないものばかり。

少女はふと視線を落とし、自分の着ている見慣れない服にゆっくりと手を伸ばした。

肌触りのいい布地。

少女が着ているのはゆったりとした、柔らかな生地で作られた服。あまり装飾はなく、シンプルといえるものだった。

けれどこれも、やはり知らないもの。

目に映るすべてのものが、少女の記憶には無い。

「ここは

「お田覗めですか？」

ちいさくつぶやいた彼女の声に、優しげな声が重なる。

音をたてずにドアを開けて入ってくるのは、まだ幼さの残る少年だった。

「よかつた。起きても平氣ですね」

ベットの横にちゃんと置かれるサイドテーブルにタオルを置き、少年は続ける。

「カイ様が見つけて……ああ、カイ様に『報告』をしておかなければ

軽く手を打ち、少女へと向き直った。

優しげな瞳を向けられ、少女はたじろいだ。

「三日間も寝てこらしたんですよ？ それに、あんたに倒れていらして……」
そうだ。

自分は倒れていたんだと、少女は思い出す。
けれどどこでかはわからない。酷く疲れ、動けないほど疲労していた自分。

それを、ここまで運んできてくれた人がいるということなのだろうか。

そうなれば見知らぬベッドで寝ていたといふことも、説明がつく。
「どうなされました？」

俯き、己の手を凝視していた少女を覗き込む。

思考の波に飲まれていた少女は我に返り、小さく首を振った。

「あの……」

「はい」

「ありがとうございます」

突然礼の言葉を言い出した少女に少年は目を瞬かせる。

「ここまで、運んできてくれたって」

見も知らぬ相手を、ここまで運んできてくれたのだ。
もしかすれば、誘拐といふこともあるかも知れない。けれど目の前の少年からは優しさしか感じられない。

それは酷く慕っていた相手に向けるほどの。
丁寧に会釈する少女に、少年が困惑の瞳を浮かべた。

おかしい。

少女から感じる小さな違和感に少年は戸惑った。

「フィリア様……？」

少年の口から紡ぎだされる名。

それはこの国にいる、神様と呼ばれる少女の名。

「本当に、覚えていないのですね？」

「はい……すみません」

白衣らしき物を着た皺だらけの老医者の言葉に、少女は申し訳なさそうに頷いた。

「謝ることではないのですよ」

ゆつたりとした、温かみのある声に再び少女が頷く。

医者は座っている椅子から腰を浮かし、体を反転させる。

「やはり、記憶喪失ですね……どうなされますか？」

「どうするもこうするも、なあ……」

小さく開かれた医者の目に映るのは、頃垂れた少年が三人。そのうちの一人が、ちいさく咳き椅子から立つ。

「失った記憶を取り戻す手立ては、あるんですか？」

少女に寄り添うように座る少年が不安げに聞いた。先ほど、彼女の部屋へと訪れた少年だ。

少年は少女の様子に違和感を感じ、医者を呼び、ここにいる一人の少年も部屋へ呼んだ。

そして医者が診察し　出た答えが、

「記憶喪失ということは、なにかの拍子に思い出すしかないだろくな」

椅子に腰掛ける整つた顔立ちの少年が言う。

数秒の沈黙を置いて、椅子から立っていた少年がうめき声をあげた。

「あー、もう……つていうかなんで記憶喪失になつたんだよー?」

苛立つた声を発し、力任せに汚れひとつ無い床を蹴る。

鈍い音が響き、痛みが足へと伝わる。それさえも、今の少年には苛立ちへと変わった。

「それはですね、カイ様

「

小さく唸る、カイと呼ばれる少年に医者が声をかけよつとしたと

か、「あの……」

話の中心である少女がおもむろに口を開いた。

宙をさまよつていた複数の視線が、一斉に少女に向けられる。

「あ、あのっ……私……」

向けられた視線にうろたえ、徐々に小さくなる声。困惑した瞳は左右に揺れ、言葉を探すように口はちこさく開閉している。

「わ、私……」

少女は口元もる。

どうすればいいのかわからなかつた。

どこかに倒れていた自分をここまで運んできてくれたんだひとつと思つていた。

けれど、突然医者を呼ばれ、あれこれと色んなことを聞かれた。そのすべては、自分の知らないことばかり。

知らないはずの目の前にいる少年たちは、優しさや慈しみのある瞳で自分を見る。

何が何だかわからない少女は、ただその視線に戸惑うばかりだった。

「フィレア様。あなたには記憶が無い。どうして記憶を失うことになつたのかすら、わからぬのでしょうか？」

「え……？」

医者は言葉を紡ぐ。

いまだ困惑し、怯えた表情をしている少女に優しく言い聞かせるように続けた。

「あなたは、フィレア・リン・ローディア。この国の神様なのです

」

少女は医者をまじまじと見た。

からかっているのだろうか。記憶が無い自分を。

「疑いをお持ちですか」

苦笑する医者に、少女は口を引き結んだ。

疑いがないという方がおかしな話だろう。

「嘘ではありませんよ。からかっているわけではありません」「まるで彼女の心を見抜いたかのように、医者は言葉を続ける。

「フィレア様。それがあなたの名です」

「フィレア……？」

それが自分の名前だと、目の前の医者は言つのだ。

戸惑いつつも何度も口の中でその名を転がす少女 フィレアを見ていた少年たちは微笑する。

「では、フィレア様」

「フィレア様！」

腰を浮かした小柄の少年の声に、甲高い少女の声が重なった。扉が壊れそうなほど勢い良く開け、その勢いのまま両腕を広げフィレアに抱きついた。

「フィレア様！！ よかつた、ご無事で……！」

力強く抱きしめ、半ば固まっているフィレアを何度も抱きしめる。

「ああ、本当にご無事で……！」

「エ、エレナさん！ ちょ、ちょっと…」

一度放し、そして再び抱きしめようとした少女、エレナを少年が慌てて止める。

「なによ、カルサ」

止めに入った小柄な少年、カルサをぎるりと睨みつけた。

吊り上がったエレナの目に、びくっとカルサが震える。

「あの…」

Hレナに抱きしめられ、その腕の中に埋もれているフィレアがもう「も」こと必死でなにかを訴えた。

「あ、あのー」

苦しい。

必死で少女の腕をほどこうと暴れていると、フィレアがほどくよりも先に彼女の体に絡まっていた腕がするりと抜けた。

「す、すみません。つい

エレナに開放され、安堵するフィレアに頭を下げた。

下げた頭を戻す際、無造作に束ねられた髪が揺れる。

フィレアは酸素を肺に送り込み、何度もむせた後目の前にいるHレナに視線を戻した。

見た目は、同じ年くらいだろうか。

少し気の強そうな目をしていて、動きやすさを主とした作りの服装で所々なにかの汚れの跡がついており、作業中だったのか袖は捲くられ白い腕が露になっていた。

エレナは見つめてくるフィレアに不思議そうな顔をし、すぐになにかを思い出したように言葉を発した。

「忘れておられるんでしたよね。……私はエレナと申します」

「エレナさん?」「

につこつと微笑むエレナの表情に、少しだけ悲しさのよくなものが見えた。

それはここにいるフィレアを除く全員の表情に表れているもの。

フィレアはその表情の意味を探るよつとしたとき、

「フィレア様、また後日来ますが……くれぐれも無理はなさらないよつこ」

まるで懐かしむよくな眼差しでフィレアたちを見ていた医者は念を押し、荷物をまとめて部屋から出て行つた。

扉が閉まると同時に、エレナはフィレアの手を取り立ち上がりせる。

「ではフィレア様! まずは御召しかえですね!」

そう声を弾ませたエレナは、少年たちを部屋から追い出し大きなクローゼットを豪快に開けた。

「 もや、これなんてどうですか？」

エレナの手に持っているフリルが数え切れないほどついているワンピースに、フィレアは勢い良く首を振った。

「 そうですか……？ では、こちらなんかは？」

フィレアが拒否したことによる気を悪くした様子はなく、また次の服を引っぱり出す。

けれど同じクローゼットの中に入っているのは、どれも同じようにフリルがつき、どこに着ていくのだと聞いたくなるような派手なものばかりだった。

エレナはフィレアが気に入らなかつた服を次々とベッドの上に放り投げる。

「 わ、私はこっちの……」

エレナが覗き込むクローゼットの隣にある、もうひとつクローゼットを開けた。

そこには今彼女の着るシンプルで動きやすそうな服が揃っていた。その中の一着を手に取り、自分の前に当てる。

「 そんな質素なもの……」

これといった装飾もなく、殆どが無地の服を楽しそうに比べているフィレアに不満げに頬を膨らます。

「 あ、これがいい」

たくさんある服を搔き分け、ひとつずつ服を手に取った。

他の服と同様、動きやすそうな、柔らかな布地で作られた服。城に住んでいる、いわゆるお嬢様などが着るよつたドレスものではなく下町に住む民が着るよつた服。

自分の胸元に押し当て、満足そうに微笑むフィレアにエレナが苦笑交じりのため息をついた。

「 やっぱり、着てくれないのですねえ」

「え？」

「こちらのクローゼットにある服、すべて私が注文した服なんですよ。けれどフィレア様、一度も着てくださなくて……」

だから、記憶をなくした今のフィレアなら着てくれるのではと思ったのだがやはり無理だった。

記憶は無くとも、やはり彼女は彼女なのだ。

「フィレア様は、変わつていませんね。その服、一番のお気に入りだつたんですよ？　よく着ていました」

今と全く変わらない、けれどフィレアの纏う空気が少し違っている。

以前のフィレアの姿がエレナの脳裏を掠めた。

「お気に入り？」

「ええ。なんでも動きやすいとか何とか……私は不満だつたんですけど、カイ様とヴェント様はそれでいいって」

以前の彼女は服へのこだわりが凄かった。

動きやすさはもちろん、軽く、多少のことでは切れないものがいと、いつも服を注文している服屋にこと細かく言つていた。それでも気に入ったものではなかつたときには、自ら下町へと足を運び、あちこちの店を物色しては買いあさつていた。

現在、記憶を失くしているフィレアの大人しめな性格と殆ど変わらないが、活発な一面を持ち合わせていたのだ。

やれやれというように、エレナは軽く首を振つた。

フィレアは小首をかしげ、不思議そうにつぶやく。

「カイ様とヴェント様……？」

「はい。カイ様とヴェント様は、フィレア様を守る　守護する者なのですよ」

とある一室の扉を音もたてずに閉め、少年は息を吐き出した。

「どうした、カイ？」

「いや……」

カイと呼ばれる少年は虚を睨んだ。

「フィレア様が記憶を失くした原因って、俺たちだよな。ヴェント

「……」

ヴェントは顎に手を当てた。

「さつき医者に聞いたのだが、フィレアの着ていた服には大量の血

がついていたらしい。だが、診察した体には傷ひとつ無いという」

「……俺も聞いた。？力？を使ったんだろうな。だから、記憶を……」

「……」

「そのせいがどうかはわからない」

「だけど、フィレア様を危険な目にあわせたのは俺たちのせいだろ？」守る、立場なのに

代々、ローディア家の？神様？には一人の守護がつく。

それはローディア家の女が受け継ぐ？力？を狙つてくる輩から守るために、そしてさまざまな災厄から守るためにと、定められたからだ。

けれど、カイとヴェントはそれが出来なかつた。

守るはずのフィレアを危険な目にあわせ、記憶を失わせた。

「カイの気持ちは分かるが、もうひとつそれ以上に重要なことがある」

鋭く細められた目が、カイを捕らえた。

「フィレアが傷を負つたという事は、誰かが傷を負わせたという」とだ

「つ……！」

「また襲つてくる可能性もある」

「……城に、か？」

「どうだろうな。とりあえず、城の警備は厳重にしておく」

ヴェントの言葉に、カイは頷いた。

踵を返し部屋から出て行つたヴェントを確かめ、手に持たれた短剣を少し抜き、ゆっくりと双眸を閉じた。

軽やかな足取りで、フィレアは目を見開かせてあたりを見回していた。

動くたびに彼女の胸にはちいさな金属音がする。

それはフィレアが起きた時から身につけられていたもので、エレナに聞くとそれは自分がとても大切にしていたものなのだと聞かされた。

見ただけで安物とわかるそのネックレスは、不思議と愛着がわく。どうしてこれを持っていたのか彼女にたずねたが、何も知らないという風に首を振るだけだった。

フィレアはそっとネックレスに触れ、視線を戻す。

広々とした空間に、橿円状の天井やいくつもある大きな扉。長く続く廊下に所々細かな模様が彫られている壁、全てが白を基調とした内装で、そこはまさに異国というものだった。

「そんなに珍しいですか？」

あちこちを見ては感歎の声を上げるフィレアにエレナは苦笑する。

「だ、だって……」

珍しいといつものではない。

こんな建物はそういう見れるものではないだらう。

「以前のフィレア様は慣れていらしたのですけれど」

「ねえ、その……私って、いなくなつてたの？」

目覚めたとたんに大騒ぎになり、皆口々に無事でよかつたと言つていた。

それは長い間自分がここにいなかつたということ。

「そうですよ。ある日ぱつたりと。どこを探してもフィレア様はおられなくて……皆で大騒ぎだつたんですよ」

「それって、どのくらい……？」

「ちょうど一ヶ月です。本当に……今まで、どこにもいらっしゃった

んですか……！」

一ヶ月。それはあまりにも長い時間。

その間、姿もない？ フィレア？ を、何人の人が心配したのだろう。それを考えることは容易だつた。

「ごめんなさい」

薄つすらと涙を浮かべるエレナに、フィレアは謝った。

「もう、どこにも行かないでください……」

「うん」

何人の人が、どれほどの心配を　彼女も、その人たちの一人だったのだろう。

涙を拭い、気を取り戻したエレナは少し恥ずかしそうに笑い、「次に行く場所ですけど、温室と図書館どちらがいいですか？」

そう言つてフィレアの手を引いた。

樂園と呼ばれるこの国。

度々訪れる旅人から、そのまた旅人へ、この国に来た人たちが伝えていくのだ。あの国はまさに樂園だと。

国の象徴であるフィレアの暮らす城は、たくさんの設備が整えられ、一般の人でも開放されている場所がある。

全てを白を基調とした内装で、来る者は皆心を癒された。

さらに、このグランド国は驚くほど平和なのだ。

長い間戦争も無く、人々は平和に暮らしている。下町も、皆ほとんど不自由なく生活していた。ある一部の場所を除いては。けれどそれは観光客や旅人が訪れるような場所ではなく、この国に住む民でさえもその場を避けるようにして一度と行くことは無かつた。

そんな平和で綺麗なところを見て、？ 樂園？ と呼ばれるようになつたのだろう。

「図書館というよりも資料室と言つたほうが正しいですね。資料室にはたぶんエルダ様がいらっしゃるかと」

綺麗に掃除された廊下を歩きながら、フィレアの歩調にあわせて

いるエレナが口を開く。

「じゃあ資料室からお願ひしてもいい？」

彼女の問いにこりとエレナが微笑んだ。

可愛らしきその顔に、フィレアは頬を緩めた。

髪を無造作にくくり、服に対してもあまり気を使つていなければ、可愛らしい顔をしている。きっときちんと化粧をし、服を見立てれば見違えるほど綺麗になるだらうとフィレアは思つ。

「さあ、着きましたよ。ここが資料室です。一般公開はされていますが、今は時間外ですね」

周りとは浮きだつて見える古めの扉に、資料室と書かれたプレート。

この部屋以外はすべて綺麗にそれでいて、エレナだけがどうしてか古ぼけていた。

「ここに置かれている書類や本は量が多くるので、他の部屋に移したり出来ないんです。貴重なものもありますし、なくなつたら大変ですからね」

フィレアの疑問に気付いたかのように、エレナは苦笑した。

ぎい、と音をたてて扉を開けた。

湿つたような、カビの臭いのようなものが鼻にまとわりつく。

「あれ、フィレア？」

その臭いに僅かに眉をひそめたフィレアの耳に、男の声が耳朵を打つ。

「フィレアと、エレナも。珍しいな」

たくさんの中棚に、溢れかえるような本。その中に佇む男が片手を挙げた。

「えつと……？」

歳は二十歳半ばだらうか。慣れ親しんだように話しかけてくる男の口調にフィレアは言葉に詰まつた。

自分が記憶を失っているということを、彼は知らないだらうか。だとすれば、ここは言つたほうがよいのか。

「ああ、知ってるよ。記憶を失くしてるんだって？」

あれこれ考えている彼女に、男は優しく微笑みかけた。

「様子がおかしいって血相を変えたカルサが言いに来たんだ」

「そう、なんですか？」

「うん。だから気に病むことは無い。君のせいじゃないんだからね」

「……はい」

ちいさく頷くフィレアに、再びエルダは微笑んだ。
片方の手に持たれた分厚い本をぱたりと閉じる。

「自己紹介、したほうがいいかな？ 私はエルダ。情報処理のよう
な仕事をしている。この城や国のことならすべて把握しているんだ」

「情報処理？」

「うん。殆どこの資料室にいるから、何か聞きたいことがあればこ
こに来るといい」

「は、はい。ありがとうございます」

「にっこり微笑んだエルダに、エレナは眉をしかめた。

「エルダ様には申し訳ないんですけど、私、ここはちょっと……」

「おや、エレナは嫌いかい？」

「き、嫌いというわけではないんですけど……この空気が、少し」
資料室には古い本が混じつていてるせいか、微妙な空気が漂つてい
る。あまり本が好きではないエレナにとってはあまり好んで行く場
所ではないだろう。

言葉を濁したエレナに、男は苦笑した。

「ところで、なんでここに？」

「フィレア様を案内していたんです。それで、ここに」

「そうか。じゃあ、もつ温泉には行つたのかい？」

「いえ」

「今はきっと綺麗な花が咲いているよ。カルサが一生懸命育ててた
からね」

「……カルサはそれしか出来ませんから。もつと使えるようになります
まで、私がこき使います」

嫌味をふくめて言うエレナを見、エルダは視線を動かした。

途中から会話に参加しなかつたフィレアが、いくつもある棚に押し込まれた本や書類を興味深そうに眺めている。

そんな彼女を見て、エルダは瞳を細めた。

どれもが微妙に模様が違い、けれど全てが白の数多くある部屋の一室で、老けた医者はうなつていた。

ぎしり、と木製の椅子がちいさく鳴く。

「なぜ、あんなところに……」「

顎をなでて首をかしげていると、

「どうしたんだ？ ローマス」

扉を開け入ってきたカイは不思議そうに問う。

「おや、カイ様」

「フィレア様の服を持つてなになつてたんだ？」

フィレアの診察にあたつっていたローマスの手にある、血まみれの服を見る。

血は今ついたばかりのように赤くはなく、時間が経ち黒く変色して固まり、服はところどころ切り刻まれ一番大きく裂けているのは背中だった。

そこには大量の血が フィレアの血がついている。

「いえ。……フィレア様を見つけたのはカイ様ですよね？」

「ああ」

「なぜ、あんなところに倒れていらしたのでしょうか？」

「あんな所？」

小首をかしげるカイに、老医者は静かに頷いた。

「ここから何キロメートルも離れています。しかも何もない草原で、フィレア様は一人でいらしたのですよ」

カイの脳裏にあの日の映像がよみがえる。

まずは近場からだと、城や国からそう遠くはないところを探しあつた。けれど、フィレアは見つからず、捜索範囲を広がせた。

そして一番最初に発見したカイは、青々とした草に埋もれ、全身を血で染めたフィレアに息を呑んだ。

ぴくりとも動かないその体に、カイの不安は増し震える足取りで近づいた。

幸い呼吸はしていた。カイは安堵し、急いで城へと運んだのだ。だが、今思い出すと不思議でならなかつた。

何も無い草原だ。ましてやここから離れすぎている。そんな場所に一人で、ましてや誰にも告げづになど

「カイ様」

思考の波にとらわれていたカイはローマスの声で我に返つた。
「そのとき、周りには誰もいなかつたのですか？」

「あ、ああ。たぶん……」

あのときはフィレアのことで頭がいっぱいになり、周りのことをよく見ていなかつた気がする。

誰かいなかつたかと聞かれれば、素直にいなかつたとは言えないだろう。

語尾を濁したカイはフィレアの着ていた服に視線を落とす。

無残に切り刻まれた服は、今現在彼女が着ているものと全く同じもの。

お気に入りだといつていていたその服は、念のためにと以前フィレアが一着買っていた。

「姫様…… フィレア様は、何の用でそこへ……？」

「ぽつりとローマスがつぶやく。

「わからない。でも、フィレア様を斬った奴は俺が見つけ出す」つぶやいた老医者の言葉に、カイは前を見据えて答えた。
その瞳に宿るのは、深い後悔の念。

そんなカイをちらりと見て、わずかに眉をひそめ、諦めたような口調で言つた。

「そうですねえ。結局の所、一番動けるのはカイ様とヴェント様だけでしょうねえから」

「やっぱりそうなるか……。まあ、任せる気もないけどな」

老医者はじいさく頷いた。

代々伝わるローディア家の末裔であり、現神様のフィレア。

一見幸せそうに暮らしているように見えるが、そういうわけでもなかつた。

彼女にではなく、この国自体に反感を持つものも少なくはない。そんな者たちから狙われる対象となるのは、今この国の一一番上、神様であるフィレア。

それは、記憶を失ったからといって変わるものではない。そもそもあまり表舞台に立たなかつたフィレアの顔を知る民はあまりいない。ある日突然いなくなつたことと、記憶を失つたことだけは伝えられていた。

けれど、反感を持つ者にはそんなことは関係ない。むしろこのことを喜んでいるのかかもしれない。

何も知らない彼女を、利用できると。

そんなフィレアを真に守れるのは、おそらく

「え……えつと？」
「どうぞお飲みください」

茫然とするフィレアの前には大きなテーブルがある。そこに置かれているのは、テーブルを敷き詰めるほど並べられたティーカップ。事前にお茶が入つており、しかも全部種類が違うのだ。

鼻腔をくすぐる香りを漂わせていくつもの波紋を広がせているお茶を見、フィレアは隣でにこやかに笑うカイに視線を移した。

「どういうこと？」

「フィレア様が好まれていたお茶を用意しました。これを飲めばもしかすると、記憶が戻るのではないかと存じます」

フィレアは顔を引きつらせた。

飲めというのか。

このいくつあるのか数えるのも嫌になるほどあるカップに、たっぷりと入れられたお茶をすべて。

「それと、同じお茶とそれをアレンジしたものもあります。どれも気に入らしていたものばかりです」

「いや、あの」

味を変えればいいという問題ではない。

だが、隣で微笑みながらわずかな期待を寄せているカイを見て飲まないわけにはいかない。

カイやヴェントたちと出会つて、実際には記憶がないだけなのだが、カイは時々突拍子もないことをする。それは彼女のことを思つてなのだが、当のフィレアはおかしな人だと認識されていた。

そうとも知らない彼は、フィレアがお茶を飲むのをそわそわと見ている。

フィレアは目の前に置かれたアンティーク調のティーカップを持ち、そつと口をつけた。

ふんわりとした優しい香りが口に広がり、甘さ控えめに作られたのかわからないが、それも丁度よく合っている。

フィレアは思わず顔をほほりぱせた。

「おいしー」

「それはよかつた。そのお茶はカルー産なんです。誰からも好まれる味を目指して、とその茶葉を作った本人が自ら売り込んできて「へえ、とフィレアは息をもらした。

妙に詳しいところを見ると、このお茶は全部カイが入れたものなのだろーう。

次々と口をつけていくフィレアはちいさく頷いていた。
それぞれの葉にあわせ、入れ方や微妙に違う温度がきちんとあつていい。以前の彼女がこのお茶たちを好んでいたのも頷けた。
もつとも、カイが入れたお茶だからなのだが。

「どうですか？」

「うーん……ごめん。ダメみたい」

「そうですか……」

カイが僅かに顔を曇らせる。

いくら飲んでも、これといつて変化はなかつた。そう安々と想い出すはずもないのだけれど。

ハーブティーを口に含み、フィレアは何か言おうとした口を開け、「フィレア？」

聞こえてきた声に口を閉ざした。

何うような口調に続いて扉を開けて入つてくるのは、白髪を揺らすヴェントだった。

「なにを……」

している、と続けようとしたヴェントの口、以上というほどのかップが映つた。殆どが入れたままの状態と変わらないが、フィレアの周辺のかップだけは残りが僅かになつたものと、すこし減つたものがあった。

ヴェントは驚いたように目を見開かせる。

「これ、全部お茶か？」

「うん。カイが入れてくれて」

「入れてって……全部飲むのは無理じゃないのか？」

「うるさいぞヴェント。ほつといてくれ

カイはちいさくヴェントを睨む。

「フィレアはカイの入れるお茶が好きだつたからな。記憶が戻るかもしれないと思ったのか」

「ヴェン。黙つてろ」

鋭くつぐヴェントにカイは再び睨みつける。

そんな二人のやり取りに、フィレアはちいさく笑った。

ヴェントは時間が経ち少し冷めてしまつたお茶を手に取り、飲もうとしてふと手を止めた。

「フィレア。何か聞きたいこととかないか？」

「え？」

突然の言葉にきょとんとするフィレアに、ヴェントは続ける。

「知りたいこととかあるか？」

気遣うような声色に、フィレアは数秒置いて、

「私の……家族……」

目覚めてからフィレアの部屋にはたくさんの人気が訪ねてきた。けれど、自分の家族と思われる人は一人もいなかつたのだ。

もしかすれば自分には家族が、親がないのではないかと思い、フィレアは不安げな声でそう答えた。

そんな彼女の気持ちを読み取つたのか、カイが優しげな声で答えた。

「フィレア様のお父様、国王がいらっしゃいます」

「お父さん?」

いると分かつたのか、僅かに頬が緩む。

「あの、他は」

一人を見上げるフィレアに、カイとヴェントは顔を見合させて、ヴェントが口を開いた。

「前神様であるアリア様が　　ファイレアの母親がいる。……でも、アリア様はファイレアを生んでもすぐに亡くなつた」

「ですから今いるのはお父様である、ダヴィン様だけです」

二人の言葉にファイレアは瞳を伏せ、

「……そりなんだ」

と、ぽつりと言つた。

「ねえ、お父さんはどこに？」

父親がいるのであれば、娘であるファイレアの顔を見にはこないのだろうか。

長い間行方をくらまし、やつとの思いで見つければ、記憶を失つていた娘。そんなファイレアを、心配ではないのか。

そんな疑問と、何も分からぬところで一人、頼れる相手がいるのならと。

そして、自分の父親の顔を見たいとも思つ。

「ダヴィン様は部屋に引きこもつてます。会つのは無理だと思いますよ」

高く澄んだ声に顔を上げ　　見上げた先に、拗ねた様子のエレナがいた。

「おい、エレナ」

「カイ様。本当のことと言つただけです」

慌ててエレナの言葉をとめさせようとするが、それはあっさりとかわされてしまった。

「だってあの方、長い間部屋にこもりっぱなしですよ？　部屋から出たことなんて、一年に一回あるかどうか……それに私、顔も見たことありませんもの」

早口にまくし立て、嫌味を含んだ物言ひは、エレナがダヴィンをあまり好いていないことが分かる。

「そ、そうなの……？」

「そうですよ、ファイレア様。ファイレア様のお父様である国王を悪く言つつもりはありませんが、私はあの方はあまりよろしくありませんが

ん。こうしてやつと帰ってきた娘を一度も見ることもなく、部屋にいるんですよ？ キツと全身力ビだらけです！！」

拳を握って高々と宣言するエレナをフィレアはぽかんと見上げた。会つたこともない相手のことをここまで言えるのは一種の才能ではないのだろうか。

「とにかく！ 会わないほうが身のためです」

「でもエレナ。 フィレアが会いたいといつている」

会いたいというのなら、会わせてやるべきではないか。

彼女にすれば、今一番頼れる者である親が、父親しかいないのだ。そんな気持ちを含めていつた言葉だが、エレナは軽く鼻を鳴らした。

「なんです。 そういうのは親から来るべきでしょう？ なのに一日ですら見に来ようともしないなんて、最低です」

国の象徴である国王に対しても随分な口の利き方だな、と今の発言を聞いた人々は思うだろう。

だが当の本人は気にする様子はない。

「エレナ、お前仕事は？ こんなところで喋つていいのか？」

このままでは一時間は軽く続いてしまうだろうエレナの話に、ライは話をそらす。

ああ、とエレナはちいさく頷き、

「終わりましたよ。あ、でもあと洗濯を三回ほど残つてますけど。すぐに終わります。私洗濯は得意なんですよー」

につこりと微笑んだ。

「カイ様とヴェント様は？ 今日はやけに城内が騒がしく感じましたけど……なにか慌てているよ’つな？」

「今日はな……。警備のために、少し人数を増やしたんだ。休憩に入っている人も警備にあたらせた」

「もともと少ないからな、それでもしないと無理らしい。門番も含めて十五人というところだ」

平和を保ってきたこの国は、城に直接襲い掛かる輩はいないため、

警備の者たちは少數しかいない。

もしものことがあつた場合や下町での暴徒が暴れた場合、カイとヴェントが出ることになつてゐる。

「あ、あの……」

ふと、フィレアが口を開いた。

「私も何か、手伝うことある……？」

毎日忙しくエレナたちが働いていることを知つてゐる。その様子が脳裏に浮かんだ。

いつまでも休んでいるわけにはいかないし、自分だけ何もしないというのも申し訳ない。

「フィレア様はだめです！　なにも心配なさらなくて大丈夫ですよで、でも」

「大丈夫だ。それに、お前はこの国の神様なんだからな」エレナとヴェントにやんわりと断られ、フィレアは俯いた。何もしなくていいといわれても、それではい、わかりましたと思えるわけがない。

少し思案し　そして不意に、

「神、
様」

ヴェントから言われた言葉がよみがえる。

それは前にローマスから言われたのと同じもの。

その酷く聞きなれないその単語に、ざわりと胸が騒いだ。

「あつた……」

フィレアは資料室の一角へと近づき、目的の本を見つけた。

二度目に入った資料室の独特的の臭いにはまだ慣れず、フィレアは軽く柳眉を寄せる。

背表紙に書かれている文字を確かめ、そつと引き抜きじっと見つめた。

ずいぶん昔からあつたのだろう。

所々が破けており、かすれて見えない部分もあった。

「神様、とは」

しつかりと本を抱えてページをめくっていると、見出しへはそう書かれていた。

フィレアは一度双眸を閉じ、ゆっくりと開ける。そして並んだ文字を目で追つた。

神様とは。

今から数百年前、グラード国が出来てまもなく女児が生まれた。元々女児が生まれることが少なかつたため、めでたいことだと国を挙げてお祝いをした。

華を愛でるように育てられたその少女は、成長するにつれ、次々と不思議なことが起こるようになつた。

まだ平和ではなかつたグラード国は隣国から襲われ、反撃し、ほぼ連日が戦いに明け暮れた。けが人は次々と出て死者も数え切れないほど生まれ、下町は全壊。辛うじて生きているのはなんとか逃げ切つた兵士や国王とその妻。そして、その少女。

もう敵の攻撃からは逃げられず、まともに戦つことも出来ない。このままでは死者を増やすばかりだと判断したとき、大量の怪我を負つた兵士が運ばれてきた。

血まみれで何かを訴えようとした兵士の手に少女の手が重なつた。

ちこちな手で兵士の手を優しく包み込み、双眸を閉じる。

なにをしているのかと誰かが問おうとした時 みるとみるみるしきこ、アリサヒ

兵士の傷が治つたのだ。

驚き目を見開いている兵士に少女は優しく微笑みかけ、そして意識を失つた。

これが、ローディア家女児に伝わる？力？の始まり。そして、神様と呼ばれる所以の始まりでもあつた。

「なに、これ」

そこまで読み終えて、フィレアは息を吐き出した。
なんともいえない感情がわき上がる。
そして、それよりも。

「戦争って、そんな……」

戦争が起つていていたことなど、まったく知らなかつた。国は平和に満ち溢れ、誰もが幸せに暮らしているのだと思つていた。
けれど、それは間違つたのだ。

昔なのだから、戦争があるのは回避できないことなのだろう。
だが平穏な生活を送つていたフィレアにはその事実でさえも戸惑いを隠せない。

平和で保たれているのは一部だけ。平穏の裏に、どんな残酷なことが起こつてゐるのかも知らない。

皆がどんな思いで、無謀だと思つてゐる戦いに挑んだのかも「こんなところでなにを？」

突然聞こえた声にフィレアは飛び跳ね、悲鳴が喉に絡みついた。
背後から包み込むようにして立つ男に視線を向け、その正体がエルダだとわかつたフィレアは息を吐き出す。

「おや、それは……」

すつと細められた瞳が追う場所に気付き、慌てて本を後ろに隠した。

「あ、あのっ」

「隠してたのになあ。いつも簡単に見つかってしまうとは」

「え？」

隠していた。

その言葉に思わず声が漏れる。

「隠してたって……」

あんなに見つかりやすいようにしておいて、隠していたと。神様について書かれた本がないか探しているとその本はすぐに見つかったのだ。

たくさんの本があるにもかかわらず、何故か田を惹いた。主張するように置かれた本は、意図して隠されたものとは思えない場所にあつた。

まるでここに来るのが分かっていたように、その本を探すと分かっていたようだ。

困惑するフィレアにエルダは微笑し、

「フィレア」

そう口を開いた刹那、廊下で金属音が鳴り響いた。耳をふさぎたくなるほど音はけたたましく鳴り、城内を占める。

「な、なにっ……！？」

「暴徒が……武器を持って……！」

簡潔な言葉を叫び、男は金属音を鳴らしながら廊下を走る。けれどその言葉ですべて把握した人々はそれぞれの場所へと走っていく。

「フィレア、行こう」

「え？」

「ここだと危ない。さすがに城の中まで攻めてくることはないだろうけど、もしもの場合ね」

戸惑うフィレアの手を引き、エルダは資料室の扉を開けた。

その瞬間、先ほどよりも凄まじい金属音にフィレアは身をすくめる。

硬い何かで打ち鳴らしていくのだろうそれは、あちこちから絶えず聞こえてくる。

「大丈夫。カイとヴェントがあたつているはずだよ。そう大事にはならないはずだ」

「カイとヴェントが！？ あの、これって……」

「このまま真っ直ぐ行って、右に曲がる。その階段を上がった先の部屋で隠れていて」

大丈夫だと叫うエルダの顔が妙に緊迫しているのを見たフィレアは問いただそうとした。けれどエルダはそんな彼女の背中を押し、走るように促す。

ちらりと背後を見ると行けといつぱりに顎をしゃくるエルダが見えた。

一瞬戸惑つたがこのままここにいても迷惑になるだけだとフィレアは言われたとおりの道を走る。

「南門！！ 暴徒の数は？」

部屋に滑り込む直前、そう叫ぶ兵士の声が聞こえた。

侵入を防ぐために閉ざされた南門には、城を守るようにして立つカイとヴェントの姿があった。

「出来るだけ気絶で済ませろよ」

「ああ、わかっている」

二人の見据える先には、それぞれ武器を持った男たち 暴徒がいる。中には武器を持たず素手で挑もうとするつわものもいた。

殺氣立つた田で睨みつける暴徒は今にも襲い掛かってきたそうな雰囲気だ。

カイはちいさくため息を漏らした。

こういつたことはよくある。

国にたいしてなのか理由はさまざまだが、こうやって時々攻め込んでくる。どんなに力の差があったとしても、懲りずにまた違う輩が攻めてくる。

極力怪我を負わせずにしているのだが、いつも何度も攻められてはいい加減本気で打ち負かしてやろうかと思つ。

低く、独特の構えをとつたカイはちらりとヴェントを見た。

「お前は左側担当な

「了解」

短く指示され、ヴェントもまた構えを取る。

その瞬間二人の纏う雰囲気が変わったことを読み取ったのか、暴徒は武器を持つ手に力を込めた。

そして同時に地を蹴り

「待て」

交戦する寸前、低い男の声が耳朶を打つた。

突然現れた男は緊迫した空氣に似つかわしく、ゆったりと歩いてくる。

今までに交戦しようとしていた暴徒はその男の登場に目を見開いた。

「勝手に動くなつて言つただる。それも同じ場所に固まつて……ふざけてんのか？」

「す、すみません……！」

ぎりりと睨みつけ、薄汚れた男はそう言い放つ。

こういつた騒ぎには兵士ではなくカイとヴェントがやることになつていて。

毎度暴徒たちを退けている一人のことを考えれば、同じ場所に固まつて侵入を試みるのは無謀だろ。

なのに、男に睨みつけられてちこく震える暴徒は固まつて行動した。

それは

「大方直前で怖くなつたんだろ」「びくりと暴徒の肩が揺れる。

一度も負けたことのない二人のことは下町でも有名なのだ。そのことは暴れる暴徒にも知られていた。

ばらばらで攻め、負けることを思えば束になつて戦つた方がいいのではないか　　そう考えたのだ。

「まあいい。……おい、お前」

吐き捨てるよつに言つた男の田線の先には、いまだ警戒を解くことのないカイがいた。

「お前、長剣か？」

「……だつたら？」

そう答えるカイに男はぬるく笑う。

「……いつと戦う。そつちのやつはお前らがやれ

「は、はい！」

そう返事をした暴徒はそれぞれに戦闘体勢に入り、誰からともなく床を蹴った。

カイとヴォントは走りながら剣を抜き そして金属音が響いた。暴徒とヴォントから少し離れた場所で、男とカイが対峙している。すでに剣を構えているカイとは違い、男はのんびりと鞘から抜く。

「悠長だな」

「そうか？ これでも急いでんだけどよ」「へえ……」

その瞬間、カイは男に向かつて剣を振りかざした。

その速度は避けきれるものではなく、まだ殆どが鞘の中に収めている剣では受け止められないもの。

けれど

甲高い、金属の触れ合つ音があたりに響き渡つた。

「つ……！？」

「ふん、まあまあだな」

カイは田を見開いた。

さつきまで殆ど男の剣は鞘に収めたままだった。だが、今はカイの剣を受け止めている。

カイはとっさに後方へ飛びず去つた。

「打ち込みはいい方か……」

男は軽く鼻を鳴らす。

片手で受け止めていたにもかかわらず、男は飄々としている。

あの速度で、あの打ち込みを片手で受け止めたにもかかわらず。

カイは人知れず頬を緩めた。

「あんた、見たことない顔だな」

剣を構え直し、疑問を投げつける。

今までに襲ってきた暴徒にはいなかつた顔だ。他の暴徒たちを見る限り、この男がリーダーなのだと分かるが、一度も攻め込みにき

たことはない。

「名前は？」

「名前、ねえ……教える義理はあるのか？」

「どこか小ばかにするよつた声色で男は言つ。
義理はない。でも、俺の剣を簡単に受け止めた奴はそつそついな
いんでね……！」

勢いよく地面を蹴る。

剣を持つ手に力をいれ、刃を丁度いい角度に直す。
当たれば確実に命を落とす角度に。

「…………だめだねえ」

そんなカイを見てほつりとつぶやいた。

「そんなんじや俺には一太刀も与えられない」
激しく剣と剣が交じり合つ。

男は微笑して、剣先の向きを変えた。

弧を描く剣に素早く反応し、カイは体勢を低くしてすばやく避ける。

「基本はいいんだがなあ……。もつかよつと、いり、…………」

な、と男は小首を傾げてみせる。

おかしい。

カイはそんな男を見ながら眉をひそめた。

剣は最初のまま片手で持ち、受けけるときも斬りつけるとともに片手
だ。

見たところ重量はまづまづで軽く作られたものではない。
ではなぜ。

「…………なあ、あんたつて何の仕事してる？」

「は？ なんでそんなこと聞くんだよ。戦いに関係ねえだろ
」

「関係ある」

普通、片手で剣を扱つことは出来ない。短剣なら、そこそこ軽い

ものならできるけれど。

だが男の持つているのはそこそこ硬く、丈夫に作られ重い剣だ。

それを長時間片手で持ち続けるとしたら、かなりの腕力が必要になる。それにカイの攻撃を一度も受け止め、切りつけようとしたのだ。

「……ま、そんぐらいは答えてやる。商人だ」

「商人？」

「そう、だ。各地に出向いては物を売つて生活している」

「た、たかが商人がそんなこと……！　それになんで剣なんか持つてんだ！」

「必要だろ。道中危険な目に遭うんだからよ。こうこう仕事してつな、むやみやたらと絡んでくる奴らがいて……商品横取りしようとするんだよ」

そう言つて啞然としているカイに微笑んでみせ、

「わかったか？　だから、剣は持つてる」

と剣をちらつかせた。

「……じゃ、じゃあなんでその商人がこんな攻め込みに來てるんだよ」

「やれやれ。質問の多い奴だな。……確かに商人はこんなことしない。でも金貰つてるんだ。この反乱が成功すれば、金を貰つ約束をしている。俺は買わたんだ」

にやりと笑う男をカイは茫然と見詰めた。

城内には微かに外からの怒鳴り声が聞こえてくる。

荒れ狂つたような叫び声や怒りの感情を直接ぶつけたような怒声。

それらが聞こえてくるたびにフィレアは肩をすくめた。

エルダに隠れていろと言われた部屋でちいさくうずくまり、フィレアは両手を握り締めたまま目蓋を開じている。

「……っ」

なにが、起こっているのだろうか。

正確なことは伝えられていないまま、ここまで来させられた。城内に走り回る人の慌てっぷりを見ればただ事ではない。

「暴徒」

暴徒が、武器を持つて。

そう叫んだ兵士の声が耳底に残る。そして、もうひとつ先ほどから絶えず頭の中で反芻している声があった。

「数は
二十一」

フィレアは辺りを見渡してするりと部屋から出た。

「カイとヴェントはどう?」—?

驚く男を無視して詰め寄つた。

焦る気持ちが早まる。

何かが起こっているの

NEDO

「お願い、教えて」

なのに、自分だけ安全な場所になどいられない。

この騒動の原因はおそらく自分た

そして暴徒の数は二千人。一人でどうにかなる人数ではない。

「」

絞りだすよ~

向へと走る。

され遅く人は驚いたよ。た彦を向けてやれただけ 特は手を止める者

「ガエ、ガエ」

門の前に佇む一人の兵士を埋

剣を二つ持つたヴェントが佇んでいた

見てフイレアは青ざめる。

「ファイルア？」

振り返り、駆け寄ってきたフィレアに驚いたように目を見張る。

「ヴェントー！」

「なんでここに……ここは危ない、部屋にいろ」

フィレアは首を横に振る。

だめだ。

何が起こっているのか、知らなければならぬような気がした。それが、どんなに残酷で悲しいものだとしても。フィレアの奥底に眠る何かがそう告げていた。

怪我は、と問おうとした時、床に倒れている暴徒が視界に映る。

「ね、ねえ……ヴェント、この人たちって……」

襲い掛かつたままの状態で倒れこんでいる男や、重なり合つている男たちは皆揃つて真つ赤な花を咲かせていた。

斬られた箇所はひとつだけ。見た目は派手なもの命にかかるような怪我ではなかつた。

「無事だ。誰も死んでいない。あとで医務室に運んでおくから」「う、うん」

小さく頷いて、もう一度倒れた暴徒を見る。

ここに倒れている暴徒の数は二十人ほど。攻め込んできた人数と同じ。

その全てをヴェントが倒したのだ。

感心する気持ちと複雑な気持ちが入り混じる。

複雑な表情で俯いていたフィレアにヴェントが声をかけると、はつとしたように、

「ヴェント、カイは！？」

再び青ざめた顔で服の袖を掴んだ。

てっきり一人は一緒にいると思っていたのだ。

けれどここにはヴェントしかいない。

「大丈夫、カイと戦つてるのは一人だ。俺が見に行くけどフィレアはここに……」

安心させるように言つたヴェントの声を遮つて、フィレアは視線の

先に駆け出した。

ヴェントが見たのは、門の隣にある小さな庭のよつな空間。ふたりのいた場所からでは四角になつていて、庭の様子は見えなかつた。

「フィレアー！？」

背後で自分の名を呼ぶ声が聞こえる。

けれど足は止まらない。

危険なことだとはわかっているつもりだ。自分が駆けつけたところで、どうにもならないことも。

でも

「カイ……ッ！…」

庭に足を踏み込んで、フィレアは目を見開いた。

茫然と男とカイを見る彼女に、

「ふい、フィレア様！？」

驚いた声を出すカイは体のあちこちに傷をつけていた。

顔や腕に細かな傷がいくつもあり、所々服が赤く染まっている。きっと今見えていない所にも怪我をしているのだろう。

フィレアはカイに駆け寄ろうとしてその視界に剣を構える男が見えた。

その姿を、カイは見ていない。未だに視線は彼女と絡み合つたままなのだ。

「……カイ！…」

思わず叫んで走り出したその瞬間、カイがぐぐもつた声を漏らした。

「ぐつ……」

苦しそうに顔を歪めるカイの額には玉のよつな汗が浮かんでいく。カイの腹部には男の剣が深く突き刺さっていた。

瞬時、じわりと服が赤く染まる。

フィレアは声にならない悲鳴を上げてぐらりと揺れるカイに手を

伸ばし、

「カイつ…」

倒れる寸前で抱きかかえた。

悲鳴が喉に絡まる。

顔を覗き込むと浅くではあるが息をしていた。

ほつと安堵の息を吐くと徐々に血が広がっていく腹部を見て息を呑んだ。

服はすぐに赤に染まり、溢れた血は地面へと滴り落ちた。

呼びかけても返答はなく、かわりに乱れた呼吸音が返ってくる。

苦しそうに顔をゆがめるカイにどうにかしてやらねばと思うのだが、フィレアにはどうすることもできない。

それがとても、もどかしかった。

「お前……

ぱつりと、酷く驚いたような声が頭上から聞こえてフィレアは弾かれたように顔を上げた。

男の握っている剣からは濡れた血が滴り落ちている。

フィレアは顔を強張らせ、とっさにカイを庇うように抱き込んだ。

どくりと心臓が跳ねる。

ぐつたりとフィレアに体を預けるカイは徐々に体温が下がってきている気がした。

思わず抱きしめる腕に力を込めたフィレアに男はすっと口を細め、

「俺のこと、覚えていないのか」

とちこく咳いた。

「え？」

「あいつらの話は本当だつたってわけか……嘘ついてたんだと思つたんだがな」

クツクツと喉で笑う男の瞳が射るよつな眼差しへと変わり、フィレアは無意識に後退した。

男は口元を歪める。

警戒するフィレアに男はひらりと踵を返し、肩越しにちらりと見て何事も無かつたかのように消えていった。

遠くなる後姿に声をかけることもせず、突然の出来事にただじつ

と見詰めていた。

完全に見えなくなつたところで、フィレアは深く息を吐き出す。かなり緊張していて体が強張っていたらしい。

ふつと力が抜けて倒れそうになつたがなんとか踏みとどまる。

「フィレア！ カイ！！」

焦つた声と共にヴェントが駆け寄つてくるのが見え、

「ヴェント！ カイがつ！！」

必死で言葉を紡ごうとするが言葉が喉につまり、上手く話せない。フィレアはカイをぎゅっと抱きしめ、震える声でヴェントに訴える。

「は、早く治療しないと……」

「医務室に運ぶ。……大丈夫だ、フィレア」

そつと小刻みに震えるフィレアの手を包み込み、ヴェントはあやすようにそう口にした。

頷いて、フィレアはぎゅっと唇を噛んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1009x/>

楽園の果て

2012年1月10日19時54分発行